

日本脂質生化学研究会

目次

脂質生化学研究 Circular

2001

JCBL

THE JAPANESE CONFERENCE ON THE BIOCHEMISTRY OF LIPIDS

Faculty of Human Life and Environmental Sciences
Ochanomizu University

1-1, Otsuka 2-chome, Bunkyo-ku
Tokyo 112-8610, JAPAN
Tel & Fax: 81-3-5978-5752

日本脂質生化学研究会事務局
〒112-8610
東京都文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学生生活科学部内
Tel & Fax: 03-5978-5752

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

目 次

第43回日本脂質生化学研究会・研究集会のお知らせ	1
平成13年度日本脂質生化学研究会総会のお知らせ	4
第43回研究集会発表演題の募集	6
第43回日本脂質生化学研究会・研究集会宿泊のご案内	10
コンラッド・エミル・ブロック先生を偲んで	17
川口昭彦	
第42回日本脂質生化学研究会・研究集会を企画するにあたって	21
中野益男	
第41回日本脂質生化学研究会・研究集会を主催して	22
古賀洋介	
脂質研究と取り組んで35年	24
脊山洋右	
Halle市で開催された第41回国際脂質生化学会(ICBL)に参加して	26
五十嵐靖之	
私の脂質研究のこれまで、そして今後	30
新井洋由	
第42回国際脂質生化学会議(ICBL)のお知らせ	34
血小板活性化因子(PAF)とその他の脂質メディエーターに関する第7回 国際会議のお知らせ	37
会の活動状況	39
会則	48

第43回日本脂質生化学研究会・研究集会のお知らせ

- 期日 : 2001 年 6 月 21 日(木)・22 日(金)
会場 : とかちプラザ
〒080-8670 帯広市西4条南13丁目
Tel : 0155-22-7890 Fax : 0155-22-5955
- 実行委員長 : 中野益男 帯広畜産大学畜産学部生物資源科学科
〒080-8555 帯広市稲田町西2線11番地
Tel : 0155-49-5555 Fax : 0155-49-5559
E-mail : nakano@obihiro.ac.jp
(事務室)TEL : 0155-49-5575
- 発表形式 : すべて口頭発表
A 講演 : 発表 15 分 + 討論 5 分 = 20 分
B 講演 : 発表 10 分 + 討論 5 分 = 15 分
講演時間は変更することもあります。
すべてスライドを使います。
- シンポジウム : 「人の叡知が開く科学の未来
—脂質生化学研究 21 世紀への挑戦—」
- 懇親会 : 帯広畜産大学附属農場ローン
6 月 21 日(木)17:30 ~ 20:00
参加費 5000 円(学生 3000 円)
当日は先着順に受け付けます。
- 演題申込締切 : 3 月 31 日(金)6 ~ 9 頁をご参照ください。
事前参加申込締切 : 5 月 18 日(金)(5 月下旬に参加章を送付します)
参加登録費、懇親会費はできるだけ事前にお申し込み
ください。別送いたしました振替用紙をご利用くださ
い。名誉会員、賛助会員の皆様には別途ご案内申し上
げます。
- 集会参加登録費 : 事前参加登録費 一般 5000 円 学生 3000 円
当日参加登録費 一般 6000 円 学生 4000 円
(非会員で参加される場合要旨集代を別途申し受けます)

テニス大会 : 帯広の森テニス場
6月20日(水)13:00～17:00 参加費 1000円

ゴルフコンペ : 上士幌ゴルフ場
6月23日(土)9:00～15:00
参加費 8000円(送迎バス, 昼食付き)

レ・イスブ・プログラム : 十勝周辺見学(池田ワイン城、中札内美術村)
6月21日(木)10:00～15:00 参加費 5000円(昼食付き)

宿泊関係 : 1+宿泊の予約をご希望の方は、名鉄観光帯広支店が取り扱います(10頁)。共済組合等の公共宿泊施設は各自でお申し込みください。

会場への交通 : 帯広駅徒歩2分、帯広空港より帯広駅までバスで40分(詳細は4頁)。

第43回日本脂質生化学研究会・研究集会 シンポジウムのお知らせ

シンポジウム：平成13年6月21日(木)

「人の叡知が開く科学の未来－脂質生化学研究21世紀への挑戦－」

第42回日本脂質生化学研究会・研究集会のシンポジウムでは、20世紀の脂質生化学研究の到達点を会員の活発な討論で確認しました。脂質の構造研究の進展とともに機能の解明が進み、生理活性をもつ脂質がようやく表舞台に躍り出てきました。今、ゲノム情報の溢れる中、情報の運び屋としての脂質の機能の重要性が再認識されています。21世紀は脂質研究の世紀となるよう新たな挑戦をこめて、このシンポジウムを企画しました。中性脂質、リン脂質、糖脂質の各分野で活躍されるシンポジストの脂質にこめる熱気を感じとって頂くために、会員各位多数のご参加をお待ちしています。講演時間は討論時間を含めて1演題45分を予定しています。

1. 21世紀の創薬 -HMG CoA Reductase 阻害薬(スタチン)開発の秘話
バイオファーム研究所 遠藤 章
2. 過酸化脂質研究の新世紀への展望
東北大学大学院農学研究科 宮沢陽夫
3. リン脂質関連酵素の機能
帝京大学薬学部 井上圭三
4. Sphingolipid activator protein
ノースカロライナ大学 神経科学センター 鈴木邦彦

平成 13 年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を平成 13 年 6 月 21 日(木)16:30～17:00に「とかちプラザ」の
レインボーホールにおいて開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 脊山洋右

- 議題
1. 平成 12 年度事業報告
 2. 平成 12 年度決算報告ならびに監査報告
 3. 平成 13 年度事業計画ならびに予算案
 4. その他

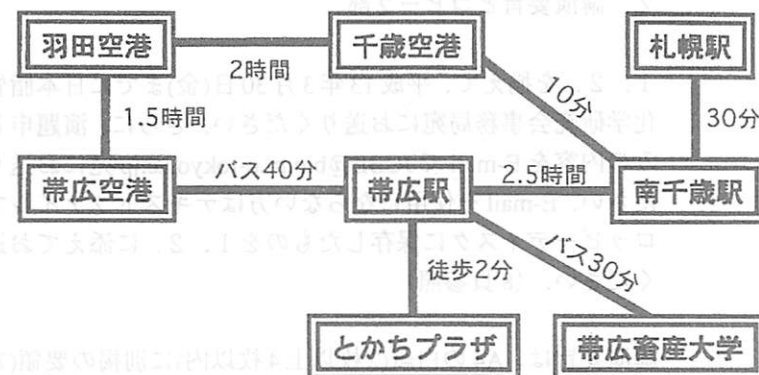
平成 13 年度日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記の幹事会を平成 13 年 6 月 21 日(木)12:00～13:00に「とかちプラザ」
の 3 階 304 会議室において開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願い
いたします。

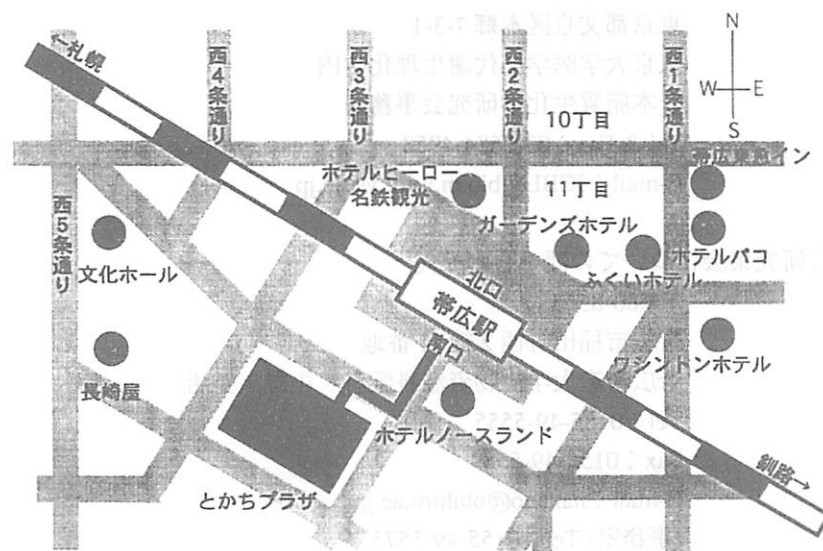
会長 脊山洋右

- 議題
1. 平成 13 年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討
 2. その他

交通案内 帯広へのアクセス



講演会場へのアクセス 帯広駅から徒歩2分



第 4 3 回研究集会発表演題の募集

○演題の申し込みについて

1. 必要事項を記入した演題申し込みとコピー 2 部
2. 講演要旨とコピー 2 部

1. 2. を揃えて、平成 13 年 3 月 30 日(金)までに日本脂質生化学研究会事務局宛にお送りください。さらに、演題申し込みの内容を E-mail で JCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp 宛にお送りください。E-mail を使用にならない方はテキストファイルでフロッピーディスクに保存したものを 1. 2. に添えてお送りください。(8 頁参照)

講演要旨は、A4 の白紙(2 枚以上 4 枚以内)に別掲の要領(7 頁)で作成してください。

演題採択は審査により決定しますのでご了承ください。

○講演要旨送付先

〒 113-0033
東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学医学部代謝生理化学内
日本脂質生化学研究会事務局
Tel & Fax : 03-5684-4958
E-mail : JCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp

○研究集会についての問い合わせ先

〒 080-8555
帯広市稲田町西 2 線 11 番地
帯広畜産大学生物資源科学科 中野 益男
Tel : 0155-49-5555
Fax : 0155-49-5559
E-mail : nakano@obihiro.ac.jp
(事務室) Tel : 0155-49-5575

第 43 回日本脂質生化学研究会・研究集会 講演要旨作成要領

1. 講演要旨は A4 の白紙に、縦 260mm × 横 170mm の枠中におさめて印刷してください。原則として、字の大きさは 12 ポイント、1 頁 38 行以内にしてください。要旨集印刷の際、4/5 程度に縮尺されて印刷されますので、ご注意ください。図表は写真やコピーを糊付けしても結構です。
2. 1 枚目の要旨には、演題名、氏名、所属、要旨を下記の例を参考にして、次の要領で書いてください。
演題名：前角 8 文字目から書き始め、2 行以内におさめる。
氏名・所属：演題名より 1 行空ける。全角 8 文字目から氏名を書き、所属は適切な略記を用いて()内に入れる。
要旨：氏名・所属より 1 行空ける。1 文字空けて書き始める。全体を枠で囲む。
本文：要旨より 2 行空ける。
3. 講演要旨の送付にあたって
講演要旨の裏側に鉛筆で印刷順を記し、コピー 2 部と共に厚紙等で保護して、6 頁の演題募集の要領に従って送ってください。

(例)

エゾウコギ *Acanthopanax senticosus Harms* がマクロファージの ACAT 活性に与える影響

依田勉一、十勝花江(未来大・応用生命)、北海太郎(代替医療大・生化)

ウコギ科のエゾウコギ *Acanthopanax senticosus Harms* の新規脂質成分はマクロファージにおける ACAT 活性の調節に関与する……………

先に我々は、エゾウコギの新規脂質活性成分を報告したが……………
……………

第43回日本脂質生化学研究会・研究集会 演題申し込み 記入要領

下記の各項目をワープロ等で入力しA4用紙にプリントアウトしたものとコピー2部を演題申し込みとして、講演要旨と共に提出してください。同時に、そのテキスト内容のみ(特殊文字や文字飾りを除いたもの)を1. E-mailの本文として、事務局のアドレス(JCBL@bio.m.u-tokyo.ac.jp)に"Subject: 演題申し込み"として送るか、2. テキストファイルとして2HDのフロッピーディスク(Macintosh、Windowsいずれも可)に保存して演題申し込み、講演要旨と共に送るかしてください。2. の場合は、ディスクのラベルに登壇者名を記入してください。必ず最終的な情報を入力し、講演要旨を送付する日に送ってください。E-mailのみの受付は行いません。

記入項目

- 演題 : 1. 演題名 2. 演者全員(所属番号)(登壇者に○) 3. ふりがな 4. 所属
5. 演題領域(下から選択) 6. 希望演題区分(A 講演 20分、B 講演 15分)
連絡先 : 7. 郵便番号 8. 住所 9. 氏名 10. Tel 11. Fax 12. E-mail address
送付 : 13. 演題申し込みの送付日、方法
通信欄 : 14. (発表期日の希望、演題順の希望などがあれば記入)
演題領域 : A: 単純脂質、脂肪酸 B: ステロイド、胆汁酸 C: リン脂質 D: 糖脂質
E: リポタンパク質 F: 脂質メディエーター G: 細胞内シグナル脂質
H: 酵素、代謝 I: 生体膜 J: 病体、栄養 K: その他

記入上の注意

番号に続いて、[tab](長さは問わない)を入力し、続いて12ポイントで記入。項目名は書かないこと。数字、記号、スペースは半角。各項目は[改行]で区切る。12.14.は無ければ空欄。特殊文字や文字飾りは下線で指示し、E-mailやディスクでは送らないこと。

プリントアウト例

1. エゾウコギ *Acanthopanax senticosus Harms* がマクロファージの ACAT 活性に与える影響
2. ○依田勉一(1)、十勝花江(1)、北海太郎(2)
3. よだべんいち、とかちはなえ、ほっかいたろう
4. (1) 未来大・応用生命、(2) 代替医療大・生化
5. B か E
6. A
7. 080-8555
8. 帯広市稲田の森2-11 未来大学応用生命科学科
9. 依田勉一
10. 099-999-1111
11. 099-999-9999
12. yoda@bac.obihiro.ac.jp
13. 3月23日、E-mail
14. 十勝花江の演題の次にしてください

講演要旨と演題申し込みを送る際には、この頁をコピーして下記のラベルを切り抜き、封筒にお貼りください。締切は平成13年3月30日(金)です。

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1
東京大学医学部代謝生理化学内

日本脂質生化学研究会事務局

第 43 回日本脂質生化学研究会宿泊のご案内

この度、第 43 回日本脂質生化学研究会が帯広にて開催されますことを、こころよりお慶び申し上げます。この度皆様方のご宿泊の手配を担当させていただきます私共は名鉄観光帯広支店でございます。

下記の通りご宿泊のご案内を申し上げます。皆様のご利用、お申し込みをお待ち申し上げております。

1) 宿泊のご案内

○宿泊期間：平成 13 年 6 月 20 日(水)～6 月 22 日(金) 3 日間
(上記以外の宿泊についてもご希望の方はお申し込みください。)

(一泊朝食付き税金サービス料含む)

記号	ホテル名	タイプ	月/日および ROOM 数(人員)			料金	備考
			6/20	6/21	6/22		
A	H ノースランド	SGL	30(30)	30(30)	30(30)	9000 円	駅より徒歩 1 分
B	H ノースランド	TWN	30(60)	30(60)	30(60)	8500 円	駅より徒歩 1 分
C	東急イン	SGL	40(40)	40(40)	40(40)	8000 円	駅より徒歩 7 分
D	東急イン	TWN	10(20)	10(20)	10(20)	7500 円	駅より徒歩 7 分
E	ワシントン	SGL	50(50)	50(50)	50(50)	8000 円	駅より徒歩 3 分
F	H ヒーロー	SGL	100(100)	100(100)	100(100)	7000 円	駅より徒歩 1 分
			300 名	300 名	300 名		

※SGL=シングル, TWN=ツイン

※上記宿泊料金は 1 泊朝食付き税金・サービス料込みです。

※6/23 以降および他の宿泊地等もお手配致しますので、備考欄にご記入ください。
希望料金等々申し込み書書きしだいで回答致します。

2) 参加申し込み方法

- ①別途参加申し込み書に必要事項をご記入の上、「第 43 回日本脂質生化学研究会・研究集会」係宛に、郵送または Fax にて期日までにお送り下さい。
- ②参加登録後、「宿泊予約券」と、振込み先通知を 6 月 14 日(木)までにご送付いたしますので、宿泊予約券は当日必ずご持参ください。
- ③振込に際しましては、ご入金確認を迅速に行えるよう、振込人名には必ず参加申し込み者と同一の"所属名"を記載いただくようご協力をお願い致します。(銀行振込手数料は各自でご負担をお願い致します。)
- ④お申し込みの際し、通信費としてお一人様 500 円を申し受けます。

3) 申し込み先

名鉄観光帯広支店「第 43 回日本脂質生化学研究会・研究集会」係
〒080-0013 帯広市西 3 条南 12 丁目(ホテルヒーロー1F)
Tel : 0155-25-0471 Fax : 0155-21-5010 担当者：泉谷雅俊

4) 申し込み締切日

平成 13 年 6 月 4 日 (月)

5) 変更・取り消し料について

○変更・取り消しは、お早めに FAX にてご連絡お願い致します。
(緊急の場合のみお電話にてお受けいたします。)

○お申し込み後の取り消しにつきましては、下記のとおり取り消し料を申し受けます

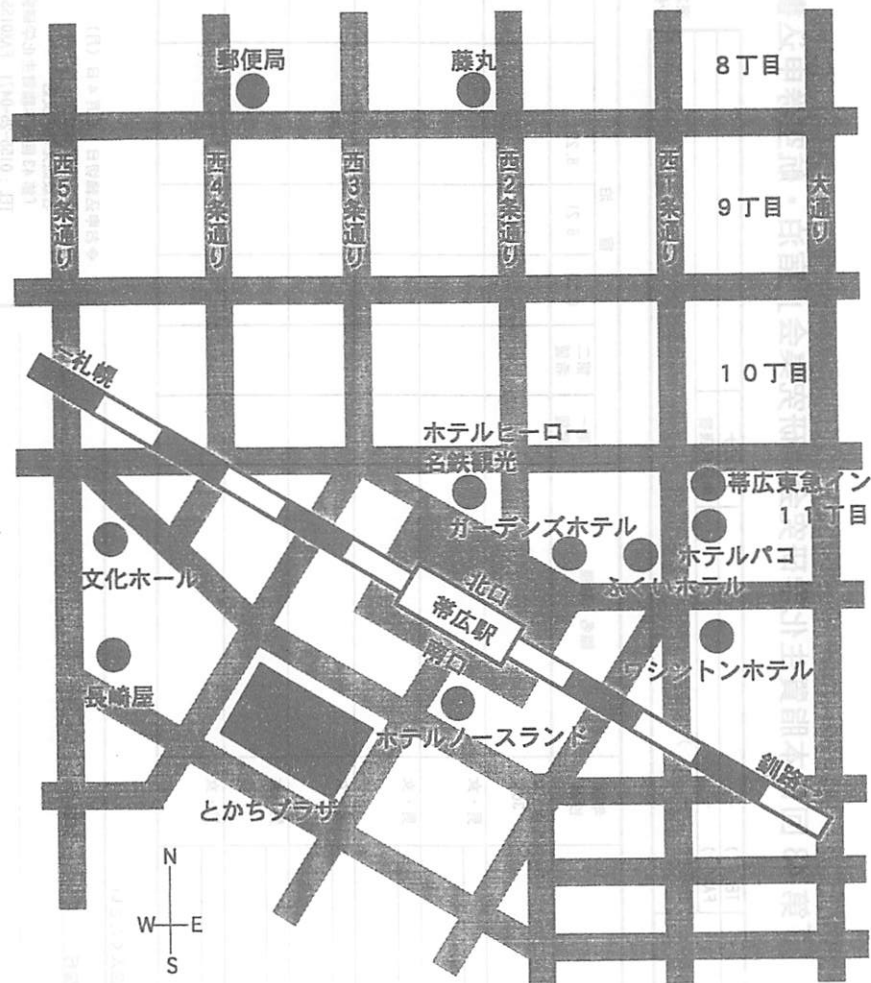
<ホテル>

	21 日前	9 日前	前日	当日以降
1 泊に付き	10%	20%	80%	100%

<航空券>

	21 日前	14 日前	3 日前	当日以降
1 区間に付き	—	10%	50%	100%

宿泊案内ホテルマップ



懇親会会場へのアクセス

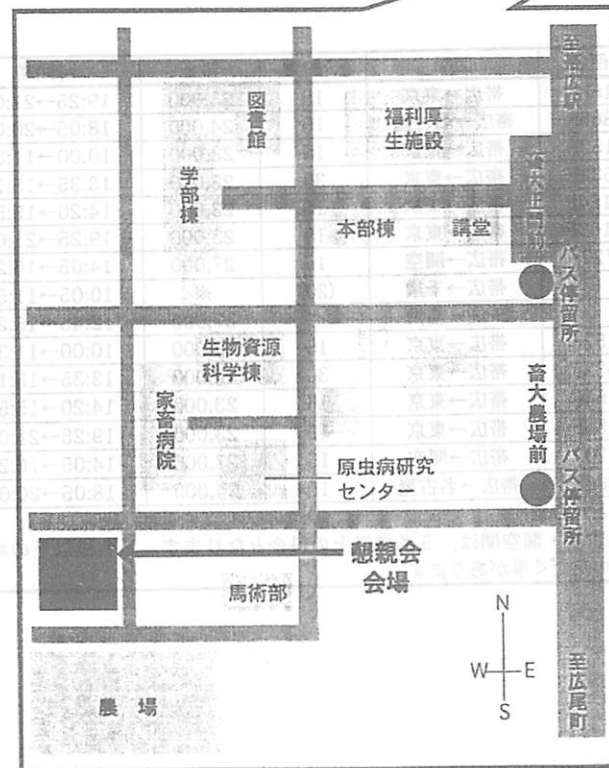
送迎バスが出ます
行き：とかちプラザ 17:00
帰：帯広畜産大農場 20:00

＜帯広駅から懇親会会場までのその他の交通機関＞

- 十勝バス：駅前から畜大農場行きに乗車、畜大正門前で下車 約30分、約500円
- タクシー：約15分、約2000円(約7km)

＜帯広空港から懇親会会場までの交通機関＞

- バス：空港から帯広駅下車 約40分、1000円
- タクシー：約25分、5500円(約21km)



野外パーティーです。日が落ちると寒くなることがありますので、セーター等の軽い上着をご用意下さい。

十勝バス時刻表

駅前発	畜大発
15:34	19:20
15:50	20:00
16:14	
16:50	
17:14	
17:34	
18:34	
19:30	
20:30	

第 43 回日本脂質生化学研究会航空券のご案内

航空券手配一覧表 (行き)

月/日	航空会社	便名	区間	予約数	料金	時間帯
6/20 (水)	JAS	151F	東京→帯広	30	22,000	07:40→09:15
	JAS	153F	東京→帯広	30	22,000	10:45→12:20
	JAL	531F	東京→帯広	40	22,000	11:45→12:50
	JAS	159F	東京→帯広	30	22,000	17:00→18:35
	JAS	721F	関空→帯広	30	26,000	11:35→13:30
	JAL	865F	名古屋→帯広	30	23,000	15:30→17:05
	ANA	273F	福岡→千歳		※	09:00→11:10
	JR	特急	千歳→帯広	(20)	27,000	12:03→14:10
※JR 料金も含まれます。 行き帰りとも 6/18~6/30 間は、同料金となります。 ご希望日での発着でお受けいたします。 往復での利用が条件となります。						

航空券手配一覧表 (帰り)

月/日	航空会社	便名	区間	予約数	料金	時間帯
6/20(水)	JAS	158F	帯広→東京	15	23,000	19:25→21:00
	JAL	866F	帯広→名古屋	15	24,000	18:05→20:00
6/20(水)	JAS	152F	帯広→東京	15	23,000	10:00→11:35
	JAL	532F	帯広→東京	30	23,000	13:35→15:10
	JAS	154F	帯広→東京	15	23,000	14:20→15:55
	JAS	158F	帯広→東京	15	23,000	19:25→21:00
	JAS	720F	帯広→関空	15	27,000	14:05→16:25
	JR		帯広→千歳	(20)	※	10:05→11:56
	ANA		千歳→福岡		27,000	12:45→15:20
	JAS	152F	帯広→東京	15	23,000	10:00→11:35
6/20(水)	JAL	532F	帯広→東京	30	23,000	13:35→15:10
	JAS	154F	帯広→東京	15	23,000	14:20→15:55
	JAS	158F	帯広→東京	15	23,000	19:25→21:00
	JAS	720F	帯広→関空	15	27,000	14:05→16:25
	JAL	866F	帯広→名古屋	15	24,000	18:05→20:00
※往復利用が条件となります。 ※帯広～東京・名古屋・関空間は、5 名様以上の料金となります。5 名様以下の場合 は中止とさせていただきます。						

「第 43 回日本脂質生化学研究会、研究集会」宿泊・航空券申込書

フリガナ	フリガナ	フリガナ	フリガナ
TEL ()	-	フリガナ	フリガナ
FAX ()	-	申込代理店	申込代理店
住所 (〒)	-	住所 (〒)	住所 (〒)

※左記住所に全員の方向の書類(クーピー
ン券類)を送付いたします。

参加者氏名		年齢 性別	職名・職階	宿泊				航空券		
フリガナ	ホッカイ 太郎	男・女 36		第一 希望	第二 希望	6.20	6.21	6.22	行き便名	帰り便名
例	フリガナ 北郷 太郎									
①	フリガナ	男・女								
②	フリガナ	男・女								
③	フリガナ	男・女								
④	フリガナ	男・女								
⑤	フリガナ	男・女								

ご返金時の銀行口座名等をご記入ください

銀行名:	銀行	支店
口座番号:	番・当	
口座名義:		

◆お申込締切日: 6 月 4 日 (月)

◆お申込・お問合せ先

名鉄観光振興会

「第 43 回日本脂質生化学研究会、研究集会」係

TEL: 0155-25-0471 FAX 0155-21-5010

※必型に応じてコピーをして下さい。

第 43 回日本脂質生化学研究会, 研究集会
レィース・プログラム・テニス大会・ゴルフコンパの申込書

この頁をコピーして FAX してください。

FAX: 0155-49-5559

フリガナ	フリガナ 申込代表者	
	住所(〒 -)	

	参加者氏名	レィース・プログラム	テニス大会	ゴルフコンパ
例	トカチ ハナエ 十勝 花江	○		○
①				
②				
③				
④				

●お申込締切日: 6月11日(月)

●集合時間は学会会場にてご案内致します。

●お申込・お問合せ先

〒080-8555 帯広市稲田町西2線11番地

帯広畜産大学生物資源科学科

中野 益男

TEL: 0155-49-5555, FAX: 0155-49-5559

コンラッド・エミル・ブロック先生を偲んで

東京大学大学院・総合文化研究科 川口 昭彦



1976年ブロック先生が勲二等旭日重光章に叙せられた時の写真。ブロック先生ご夫妻、ブロック先生の右が今堀和友先生、右端が筆者、左端が筆者の妻。

20世紀が終わろうとしていた昨年末、コンラッド・ブロック (Konrad Bloch) 先生がご逝去されました。素晴らしい研究業績のみならず、先生の温かい人柄にも敬愛の念をもつ者としてたいへん残念に思います。

ブロック先生は、1912年1月ドイツのナイセ (Neisse) でお生まれになり、1934年ミュンヘン (Munich) 工科大学を卒業されました。1936年に渡米され、1938年コロンビア (Columbia) 大学のクラーク (Clarke) 教授のもとで Ph.D. の学位を得られました。その後、同位元素を生化学研究とくに代謝研究に導入されたことで有名なシェーンハイマー (Schoenheimer) 教授の薫陶を受けられました。不幸にしてシェーンハイマー教授が若くして急逝した後は、ブロック先生が師に代わって先駆的な研究を推進されました。先生は、1946年シカゴ (Chicago) 大学の生化学教室に助教授として移られ、1950年正教授になられ、1954年ハーヴァード (Harvard) 大学の化学教室に生化学担当の正教授として迎えられました。1990年代にはハーヴァード大学名誉教授になられました。その間、先生の業績「コレステロール、脂肪酸の生合成の機構と調節の研究」に対して、リネン (Lynen) 教授と連名で、1964年度ノーベル生理学医学賞が贈られました。そのほ

か、世界各国の学士院および大学から数多くの賞や名誉博士号を受けられました。また先生は、アメリカ生化学会会長、科学院の生化学部会の議長、国際生化学連合国内委員会の議長などの要職を歴任されました。

ブロック研究室に日本から留学した者は約20人に達しています。また、先生と研究上の交流があったわが国の研究者は、おそらく100人を越えるのではないかと思います。ブロック先生は、1966年以降3度にわたって来日され、日本生化学会の名誉会員であり、北海道大学から名誉学位を贈られ、また勲二等旭日重光章に叙せられています。

ブロック先生は、ノーベル賞の対象にもなったコレステロールの生合成機構やそれに関わる酵素の反応機構、さらに1960年代からは飽和脂肪酸、モノおよびポリ不飽和脂肪酸の生成機構やその調節機構などに目覚ましい研究業績をあげられました。これらについては、先生ご自身の著作も多数あり、わが国でも多くの方々によって紹介されていますので、ここでは、研究の過程でのエピソードをご紹介します。

先生の業績のうちで、どうしても忘れてはならないものが、グルタチオン生合成に関する研究です。先生のグループはハト肝や酵母の酵素系を用いて、グルタミン酸、システインとATPからグルタチオンが合成されることを明らかにしました。この生合成反応に関しては、ながく生化学方面での語り草となっている創作劇をご存じの方も多いと思います。当時はtRNAがタンパク質合成に必須因子として登場して間もない頃で、グルタチオンの合成にもtRNAが関与するというロックフェラー研究所(Rockefeller Institute)のある研究員による論文が投稿されました。この論文の審査はブロック先生にまかされましたが、創作の場合は非常によく論旨を通してありますので、審査員として全能ではなく、疑問を抱きながらも受理せざるを得なかったわけです。J.Biol.Chem.に受理されたこの報告に対して、ブロック先生のグループは否定的なデータを同誌に送られ、両者が同一誌上に掲載されました。その後、複数の研究者による追試の結果、この研究員の完全な机上創作であったことが明らかになったのです。

次はブロック先生の人柄をもっともよく示していると思われるエピソードです。脂肪酸生合成に、アシルキャリアタンパク(以下ACPと略す)が重要な役割を演じていることは、皆さんよくご存じのことです。その発見者として、ロイ・ヴァジェロス(Roy Vagelos)教授とサリー・ワキル(Salih Wakil)教授があげられています。細菌の脂肪酸生合成に熱安定因子が必要なことは、1961~62年にヴァジェロス教授が*Clostridium kluyveri*で、ブロック先生らが*大腸菌*で、それぞれほとんど同時に発見しました。ACP

の分離精製は、1964年にヴァジェロス教授らによって*大腸菌*から成功しました。当時、ブロック研究室には*大腸菌*の熱安定因子の分離精製に関する研究を希望した人が多数いたそうです。しかし、先生の返事は、「*大腸菌*ではなく、*C. kluyveri*の系ではあるが、脂肪酸生合成に熱安定因子が必要であることを発見したのは、ロイの方が明らかに我々より早い。熱安定因子に関する研究は、当然ロイが行なうべきものである」だったそうです。そればかりでなく、ブロック先生は、当時NIHの一研究員であったヴァジェロス博士に激励と助言を終始与えておられたそうです。筆者がブロック先生の研究室に滞在した1973~75年の間でも、「ロイの研究室で昨日こんな結果が出たそうだ。参考にしてはどうか。」と先生が言われることがよくありました。お二人の非常に強い信頼関係に感動し、羨ましくもあったことをつい昨日のこのように覚えています。

ブロック先生は、研究室員や研究室出身者ばかりでなく、先生と多少なりとも関わりをもった多くの人々から、いわゆる"good boss"として慕われていました。これは、先生の温和な風貌と物腰の柔らかさばかりでなく、相手の意見を十分に尊重し、自らを強く主張しようという態度を微塵も見せられないことからくるように思われます。

先生は研究者個人の能力およびアイデアを徹底して尊重という立場をとりましたが、これは決して「任せっぱなし」ではありませんでした。筆者が留学した頃は、先生は内外の要職についておられたせいか、旅行されることが多く、先生ご自身の意志に反して研究室を回られる機会も少なくなりました。それでも大学内にいらっしゃる間は、必ず日に一度は研究室を回られ研究員と研究結果について討論され、指示を与えておられました。また、先生はけっして仕事をpushしない建前をとっておられ、温和な微笑と共に、「What's new?」とか「How is it going?」とか言われながら傍らに來られ、液体シンチレーションカウンターや、ガスクロマトグラフィーの前で研究者と一緒に一喜一憂することもよくありました。

先生は常々「生命現象の前には研究者は謙虚な態度であらねばならない」と言っておられました。私たち自身があまり気にも留めなかった様なちょっとした新事実をもとに、未知の現象を説明するための物語を創っていく先生の非凡な能力は他人の追従を許さないものでした。一方、先生が研究員のアイデアを大切にされ育成される方針をとっておられることは上述したとおりですが、もしそのアイデアが研究員独自のものであった場合は、個人名で投稿することを勧められ、そのためのあらゆる便宜はかっておられました。

研究面ばかりでなく、ブロック先生は学生に対する教育にも力を注いでおられました。ある時、学生の授業評価の結果を気にされ、「学生がコンラッド・ブロックは近づきたいと言っているが、自分は授業中も授業後も質問を受ける時間を十分設けているのにおかしいな」と首を傾げておられました。筆者は、「Dr. Bloch（私どもはこう呼んでいました）は、学生にとって偉大すぎるのですよ。」と申し上げましたが、先生はご不満の様子でした。

また、ある時、アメリカの研究費（grant）の制度と日本のそれとの比較に、数時間の議論をしたことも思い出深いことです。この時も、先生は非常に丁寧にアメリカの制度を説明してくださり、筆者の拙い英語による日本の制度の説明を真剣に聴いてくださり、両者の特色を話したことを覚えています。

ブロック研究室は、言うなればどことなくのんびりしたムードをもった研究室でしたが、その悠々とした雰囲気にもかかわらず、常に学界をリードしてゆく業績をあげてゆかれる先生の能力に、ある種の感嘆の念を抱くのは筆者ばかりでなく多くの人々に共通した印象でしょう。

先生は音楽をこよなく愛され、自らもピアノやチェロを演奏されました。研究室員を年に1、2回ご自宅に招かれ、奥様手作りの夕食を楽しみながら、先生のピアノ演奏を聴いたことが思い出されます。

ブロック研究室に関係した研究者が世界各国から100人以上が集まって、1980年にWoodshole, U.S.A.で、1990年にはBanff, Canadaで、国際シンポジウムが開催されました。次のシンポジウムは日本で是非開催したいと一同で考えておりましたのに、この機会がないまま先生がご他界されたことはたいへん心残りです。

ブロック先生のご冥福をお祈りいたします。残された奥様のご多幸をお祈りいたします。

第43回 日本脂質生化学研究会・研究集会を 企画するにあたって

実行委員長 中野 益男

帯広で初めての研究集会の開催が決定された時、お引き受けする声が震えていたのを覚えています。

丁度50年前、脂質研究の草分けであられる藤野安彦先生が帯広畜産大学に赴任され、帯広での脂質研究が始まりました。この記念すべき年に研究集会が帯広で開催されることになり望外の喜びです。藤野先生のスフィンゴ脂質の研究を通して、多く研究者が巣立っていきました。いつかは、帯広で藤野門下生が集って研究集会を開きたいと願っていました。丁度、「あぶらが切れかけていた」ところで、この集会をきっかけに「あぶらをさして、あぶらの乗った」研究をと思っていたところです。今年は本学の新制大学創立60周年にも当たり、二重の喜びです。

本研究集会を21世紀への幕開けにと、「脂質生化学研究21世紀への挑戦」と題してシンポジウムを企画致しました。シンポジウムには25年前にお世話になったドイツ・エルランゲン大学医学部生理化学研究所のWerner Fischer教授をお招きしてシンポジウムを開くことにしていました。残念なことに昨年（2000年）11月にご逝去なさいました。先生のご功績を偲んでのシンポジウムとなります。

帯広・十勝は北海道の東部に位置し、北海道の中でもっとも大地を感じさせる自然環境が残っているところです。日本の北端ではありますが、沢山の緑にふれて、次の研究への英気を養っていただけたらと思います。

地方大学でのささやかな研究集会となりますが、どうぞ全国から多数の研究者、研究学徒の皆様が参加してくださいませようお待ちしております。また、レディースプログラムも用意しておりますので、ご夫人方どうぞご一緒においでください。

第42回日本脂質生化学研究会・研究集会を開催して

産業医科大学・生体物質化学 古賀 洋介

第42回日本脂質生化学研究会・研究集会は2000年6月16日(金)、17日(土)の2日間にわたり、北九州市小倉の北九州国際会議場で開催されました。九州での開催は40年ぶりとかで、参加者数の予測には苦慮しました。北九州での学会は同じ福岡県でも福岡市と比べると例が少なく、物珍しさから参加者が多くなるという見方と、遠隔地ゆえ不景気の折から各研究室とも旅費を節約して参加者をしぼるのではないかと、という見方がありました。結果的には後者に近かったようで、参加者は177名と例年と比べてだいぶ少なくなっていました。しかし、演題数は一般講演68題、シンポジウム7題と例年と比べてそんなに少ないわけではなかったのも、発表する意欲が低下したわけではなかったと思います。脂質生化学研究の重点が医学関連分野にある現代において、私たちのような純理学的に古細菌の脂質の仕事をしている者がシンポジウムの企画するにあたってどうするかということにも頭を悩ませました。私たちがこの研究会に長く参加させていただいて気持ちよく討論できているのは専門を越えた脂質生化学という共通のつながりを保つような諸先輩のご配慮があったからではないか、ということを感じておりました。20世紀の最後の年にこの伝統を思い起こすことも無駄ではあるまい、というのが企画の発想の出発点でした。医学に限らず広い範囲の脂質生化学研究を共通のものにするという考え方です。シンポジウムといえば、現時点でのトピックを深く討論する、というのが普通だと思いますが、そうでない企画にもかかわらず、依頼したシンポジストの方々には快く講演をご承諾いただきまして大変ありがとうございました。企画の意図がどの程度達成されたか心許ないのですが、「同じ会に参加していて顔だけ知っているが会場が違って日頃話を聴く機会がないという人の話を聴けてよかった」という感想もいただいて、幾分かほっとしているところです。会場は最初、産業医科大学を考えましたが、交通の便を考慮して北九州国際会議場にしました。駅と会場とホテルが徒歩5～10分以内、懇親会も同じ建物内で出来るというのは参加者に好評だったようです。メインホールが大きすぎたのはやむを得ないことでした。アルバイトの人員も最小限で行ったため、参加者の皆様にご不便をおかけ

したかもしれませんが、会の進行にはトラブルもなく、スムーズな運営が出来たと思います。41回研究集会を主催された玉井先生も書かれていました「小規模の研究室でも遂行可能」ということは今年も当てはまりました。医学部の一般教育を担当する、専任教員二人、大学院生や学生のいない講座制でない研究グループでも友人、知人の人的経済的援助を得て何とか運営出来た、というのが実状です。その点で、人的経済的援助を賜った各方面の方々にこの場を借りてあらためて御礼申し上げます。ホームページは前回の例にならって一応作り、会員外からの問い合わせもあり、それなりの効果はあったと思いますが、サーキュラーと同じ内容を載せて公開したきり更新もせず、プログラム掲載なども怠り、今にして思うと有効活用の点で不十分だったと思います。ホームページを作るのがこれが初めて、という経験不足のためでした。最後に、大過なく研究集会を終えることができましたことを一人二役以上の大活躍で協力してくれた研究室の実行委員とともに喜びたいと思います。

脂質研究と取り組んで35年

会長 脊山 洋右

昭和40年3月に医学部を卒業した後に、インターンをやりながら生化学教室でユーブングと称するトレーニングコースに参加したことが私にとって生化学との付き合いの始まりです。大学院の入学試験を受けた時は島蘭順雄教授でしたが、合格して4月に入学してみると山川民夫教授が伝染病研究所から着任してこられ、このことが脂質研究をライフワークとするきっかけとなりました。

当時は学生の間で動的生化学(dynamic biochemistry)という言葉が流行っていたので、先生に細胞膜の研究をやりたいと申し出たところ、それはちょうどいい、細胞膜の糖脂質を抽出しろといわれて、材料の「いくら」を買いに出されたのが第一日目の仕事でした。それから2~3年間、赤外分析やガスクロマトグラフィーなどの分析技術を教えられ、論文を1つ書いたところでハーバード大学に留学することになりました。ハーマン・カルカー教授のもとで糖質代謝のエピメラーゼを研究してきましたが、生化学教室に戻ってからは糖脂質と酵素の両方を扱った経験を生かして、テイ・サックス病に関連するヘキササミニダーゼの基質特異性を調べ、その成果で学位を戴きました。

大学院生活に一区切りがついた、ちょうどこの頃のことです。先天性代謝異常症の脳髄黄色腫症(CTX)に関してコレステロールの定量分析を依頼されました。糖脂質を扱っていたのでは師匠である大先生の域を越えられないから、なんとかして転身をはかろうとしていた時期であったことと、教室に導入されたガスクロマトグラフ・質量分析機の応用に打って付けのテーマであったことから、マスフラグメントグラフィーという手法を用いて血清中に微量にあるコレステロールの定量に取り組み、機械の調整に徹夜もしましたが短期間に論文をまとめることができました。このことが現在に至るまで25年に及ぶCTX研究の始まりです。3人の患者の分析データでJournal of Biochemistryに投稿したところ、レフェリーから症例数が少なすぎると難色を示されましたが、まれな症例なので数が貯まるのを待っていただけないと説明して掲載してもらいました。25年経った今、この判断は正しかったということが実証され、ほっとしております。

第2のテーマは脂肪酸合成の調節機構ですが、これも質量分析機の応用を視察に渡米した際に、Sweeley教授のもとで重水で還流した肝臓の脂肪酸に取り込まれた重水素の分布を調べた時の体験がきっかけとなりました。当時の教科書的な機構では説明できないほど多数の重水素が取り込まれているのを見て、「これは変だぞ」と思ったことが10数年にわたる研究の発端になりました。川口昭彦氏という盟友に出会ったこと、モルモットのハーダー腺という脂肪酸合成の盛んな臓器を実験対象としたこと、など幾つかの好条件に恵まれて、多くの成果を挙げることができました。また、日本生化学会の奨励賞を戴いたのも、この研究に対してです。

第3のテーマであるハーダー腺に見る脂質代謝調節の仕事も、頼まれ仕事で、深い読みがあつて始めたことではありません。小川秀子教授からラットの眼窩脂肪の脂質分析を依頼されたときはハーダー腺という言葉も知りませんでしたし、分枝鎖脂肪酸の知識があつたわけでもありません。しかし、モルモットやゴールデンハムスターに巡り会ったことや、Pevet教授や Buzzell 教授という共同研究者に恵まれたこともあつて、アンドロジェン受容体を介した調節機構を明らかにすることができました。

このように脂質研究に取り組んで過ごした35年を振り返ってみますと、師匠と共同研究者に恵まれ、研究材料も適切であったという幸運の賜物であると感謝しております。

この3月末日をもちまして、40年住み慣れた本郷キャンパスに別れを告げることになりましたが、幸いにしてお茶の水女子大学にて研究を続けられることになりました。研究の重点は栄養学にシフトしますが、これまでにやり残したことも仕上げたいと思います。(2001.1.1)

Halle 市で開催された第 41 回 国際脂質生化学会(ICBL)

に参加して

北海道大学大学院・薬学研究科 五十嵐 靖之

ICBL(International Conference on the Biochemistry of Lipids)の略称で呼ばれる国際脂質生化学会の第41回大会が旧東ドイツのLeipzigとなり合わせのHalle (Saale)市にあるMartin-Luther University 大学を会場にして、2000年9月13日から16日まで開催された。毎年開かれるこのICBLの活動には筆者自身アメリカにいた時から関心を抱いていたが、たまたまそれらの年のメインテーマと自分の関心とがうまく一致せず実際に自分で参加するには至らなかった。しかし今回は会議の主要テーマがlipid signallingと細胞膜のintegrityやdomain形成、traffickingということで現在の自分の研究テーマに近く、また長い間このICBLの理事として活躍しておられる東大医学部の背山先生にも強く参加を勧められた経緯もあって一度覗いて見る気になったのである。それと私のもう一つの参加の理由として、古くからドイツの芸術や学問、文化の中心として栄えてきたHalle、Leipzig、Dresdenなどの旧東ドイツの街々や人々の生活が、この10年余りの旧体制崩壊とそれに続く移行期間の混乱を通してどのように変貌を遂げてきているのかを目の当たりに見てみたいという密かな好奇心にかられたこともあった。しかしこの好奇心は、後述するように筆者には幾分高くつくことになったのだが。

広い脂質研究のなかでも上記の極めて今日的なテーマのもとに会議を主宰したのは地元Martin-Luther大学のRenate Ulbrich-Hofmann教授であったが、アメリカやヨーロッパからこれらの分野の第一線で現在活躍中の蒼々たる研究者がゲストスピーカーとして招待され、アメリカの学会でよく見かけるような活発な討論が繰り広げられた。この会議の内容はChemistry and Physics of Lipids 107 (1) 1-142 (2000)にそのAbstractの全容が掲載されているが、ここでは筆者の印象に残った講演を中心にいくつか主だった発表を紹介してみたい。学会の口火を切ったのは第4回Van Deenenメモリアルレクチャーとして、マックスプランク研究所のHuber教授によってannexin familyのX線構造解析に関する自身の永年の研究が紹介され、それらの真の生物学的役割の解明が今後期待されると話を結ばれた。

Section 1 - Structural biology of enzymes acting on lipidsでは、UCSDのDennisによるphospholipase A2の分子多様性とその活性化メカニズム、UKのWilliamsのPI3K、VanderbiltのExtonのPLDについての講演がまずあった。ただしこの3人の講演はアメリカでの類似の会議でたびたび聞かされてきた内容とあまり変わらず、筆者には少し新鮮味に欠けた気がした。それよりも同じセクションではフランスMarseilleのVergerによるリパーゼの3次元構造解析に基づいた脂質二重層との接合にともなう"lid"のはずれを想定したリパーゼ酵素のinterfacial activationモデルの提唱は、ラフトなどの細胞膜脂質によるタンパク機能の調節を考える上で非常に重要なコンセプトで興味をもてた。そのほか多くのシニアな発表者に混ざって京大院生の藤橋さんの、結晶化に成功したプレニル化酵素のX線解析による構造解析の研究が、このセクションの口頭発表の一つとして選ばれたのが特筆に値しよう。

Section 2 - Sources, targets and mechanisms in lipid signallingでは、植物細胞の脂質シグナリングに関する仕事に続いて、ドイツのWetzkerによるPI3Kの研究やロンドン大学のCockcroftによるPI輸送タンパク質の研究が発表されたが、これらは現在問題となっているPI(3)Pを介した小胞輸送におけるイノシトール脂質の役割解明に焦点を当てていた。そのほかこのセクションでは、South CarolinaのHannunが細胞内シグナルとしてのセラミド代謝に関わる酵素群の役割、特に最近自ら精製クローニングしたミトコンドリア由来の中性セラミダーゼの研究を紹介し、ミトコンドリアなどの細胞内小器官にもそれぞれ独自のスフィンゴ脂質代謝経路とその生理的役割がある可能性を広く喚起した。一方オランダのMoolenaarはLPA, S1Pなど血小板由来の生理活性リゾ脂質に関するこれまでの研究を総括し、これらのPathogenesisにおける役割を強調したが、概して総括的な内容で少し物足りなかった。今回の会議の中で最もhotな実験結果と議論が展開されたのはSection 3 - membrane integrity and traffickingであったと筆者は思う。Sloan-KatterlingのSoellnerによるSNAREやオランダZwaalのグループによる膜脂質の非対称性に関わるMRP1の仕事、Dresdenのマックスプランク研究所のKai Simons (Simons自身は研究所の立ち上げで忙しく残念ながら顔を見せなかった) グループによるpowerpoint動画を駆使してlipid raftを可視化し細胞内の行方を追い掛けた発表は多くの聴衆に感銘を与えたようだ。San DiegoのSchnitzerによるカベオリン-アフィニティにより精製

した純化カベオラの研究やGenevaのGruenbergのlate endosomeに特異的に存在するLBPA等に関する発表もよかった。Gruenbergの講演はEMBO plenary lectureとしてなされたが、このLBPAの仕事は勿論、最近彼の研究室から理研フロンティアに戻った小林俊秀先生によって主になされた仕事である。またコレステロールやその他の脂質の細胞外輸送に関わるABC transpoterの研究が最近急速な広がりを見せているが、ここでもNIHのSmithのグループやNCIのDean、更には最近Tangier病の原因遺伝子として同定され、この患者のHDL欠損と関わっているとされるABCA1(新しい命名法ではABCA1)の研究を切り開いた一人であるドイツRegensburg大学のSchmitz等の発表があって活発な議論が展開された。またこのセッションの最後に、東大の脊山洋右先生が先生のライフワークともいえるコレステロールの異常蓄積が原因とされる脳髄黄色腫(CTX)の発症機構に関する研究を、今回のICBLの特別講演として発表された。それと合わせて長年にわたる脊山先生のICBLにおける活躍が表彰されることになったが、これを機に先生にはこれからもJCBLもICBLとの連携を更に強めて行かれる活動をお願いしたいし、会全体としてももっと取り組みを強めていく良い機会ではないかと感じた。

ポスター発表はシンポジウムの合間に行われ、予定していたボード数よりも多く約150題の発表数でなかなか活発であった。そのほか、学会運営にはこの会議の通例らしく、開会セレモニーは旧市庁舎のバロック様式の広間でドイツワインを飲みながらHalle市の女性市長からの歓迎を受けた。また3日目の参加者ほぼ全員による小旅行は、Halle市郊外にある、Martin-Lutherが説教をしたという古いMerseburg教会や有名なGoethe劇場のある古くからの温泉公園、Bad Laushaedt、にバスで出かけ、Goethe劇場でのコンサートやホールでのボリュームのある晩餐会を楽しんだりした。この会への日本からの参加者は東大の脊山先生と内島先生、信州大学の青山先生、いつも参加しておられる帝塚山学院大の入谷先生と福田先生、それに帝京大学の瀬高、唐沢先生など23名を数え、300人を上回った全参加者の中で、数としては22名のアメリカを抜いて開催国のドイツに継いで多かった。

さて、最初に触れた理由で、私は学会後の2日間を使って近くのLeipzigやDresdenに足を延ばしてみることにした。Halleでも感じたが、これらの都市はいずれも中心街至る所ビルや道路が工事中で、一面では同じ敗戦国

であったオリンピック時の東京を思い起こさせた。違いは、これらはいずれも歴史的な文化都市としての古い街並みや石の建物を保存した形で進められている点であろう。Leipzigでは、大学のあるセンター地区はかなり復興保存されていて、日本から森鷗外が留学してきた頃の街の面影が感じられた。バッハが長い間パイプオルガン奏者を勤めていたトーマス教会や、ベルリンの壁崩壊の狼煙となったミサの行われたニコライ教会などはたくさん観光客で終日にぎわっていた。第二次世界大戦で最も激しく破壊された都市の一つDresdenでも、広大な駅前広場の開発も始まり、シグナル配列の研究で一昨年度のノーベル賞受賞者となったBlobelが、その賞金全額を生まれ育ったこの都市の教会修復のため寄付したという(この話はケルン大学のStoffel教授から最近聞いた)旧市街区の復興もかなり進んでいる。しかもDresdenはKai Simonsを所長として迎えたマックスプランク研究所の開設などヨーロッパに新しい息吹きを吹き込むサイエンスの中核都市としても大きく変貌しつつある。これらの都市の訪問を終え、帰国の途に着くはずだったLeipzig空港のカフェで、ドイツビール片手に旅行中集めた貴重な12年前のニコライ教会前のデモの写真などを眺め、いったいあの社会主義体制ってなんだったのかなどと一人感慨に耽っていたが、ふと気がついたら、旅券、航空券、スライド、カメラなどほとんどの持ち物を入れてあったテーブルの下に置いた旅行カバンが、多分、隣に座った若者グループ(油断大敵!この地域の経済不振から若者の失業率が高いらしい)によって持ち去られていて、呆然自失。その後の慌てふためきようと人知れぬ苦闘とはとうてい書くに忍びない。

次の第42回大会は2001年6月5日から9日までノルウエーのフィヨルドに面したBergen市で、Bergen大学のRolf K. Berge教授が主催して以下の4つのテーマを中心として開催されることになっている。1 - Mitochondrial biogenesis and functions, 2 - Lipids as regulators of apoptosis and cell division, 3 - Obesity and insulin resistance, 4 - Membrane structure and membrane fusion. この北欧の美都Bergenでの会議にも日本から多くの脂質研究者が参加されること期待したい。また私のような被害に決して遭われないようにと願っている。

私の脂質研究のこれまで、そして今後

東京大学大学院・薬学系研究科・衛生化学教室 新井 洋由

私は、今から約30年前の1978年に東京大学薬学部野島庄七教授に主宰する衛生化学・裁判化学教室に配属になり、その時から脂質の研究を始めました。当時学生の間では遺伝子や免疫学に人気があったのですが、私は何故か細胞膜や細胞内オルガネラの方に興味があり、また、野島庄七先生の神秘的な（平たく言うと分かりにくい）脂質の授業に惹かれて、迷うことなくこの教室を選びました。

研究室でのテーマは大腸菌のホスホリパーゼAでしたが、来る日も来る日もTLCを上げて、シリカゲルをかき取り、遊離脂肪酸を液体シンチレーションカウンターで定量していました。たしか修士課程2年生の時に、当時先輩の名取泰博氏（現国際医療センター部長）ともっと簡単なホスホリパーゼのアッセイ法はないかと模索し、今良く使われているDoleの抽出法を利用した遊離脂肪酸の選択的抽出法を開発しました。「最後にヘプタン層に入れるシリカゲルの粉がスパーテル一杯がちょうどいい」なんてことを「発見」したりして、古き良き時代でした。

博士課程まで6年間終始ホスホリパーゼの研究を行っていましたが、大した成果も出せず、特に蛋白質の扱いが全く分かっていないことを痛感し、脂質に関わる蛋白質を研究しようと、アメリカのリポ蛋白質の研究室に留学することにしました。留学先の研究室では、血漿中のレシチン・コレステロールアシルトランスフェラーゼ（LCAT）やコレステロールエステル転送蛋白質（CETP）といった蛋白質を毎日精製する日々が続きました。当時は世界中でCETPのクローニングはおろか精製法もまだ確立されていなかった状況でしたが、この研究室で私は毎週0.5mgの精製蛋白質をとっていました。ちょうどその頃、日本に帰っていた前任のポスドクから、「日本人の中にCETP活性が無いヒトがいる」との連絡を受けました。後から思うと、これが最初のCETP欠損者の発見だったのですが、まだ、日本ではCETPのアッセイ系すら確立されていなかった状況において、測定の違いではないかと判断し、追求することを辞めてしまいました。したがって、この研究は我々の成果にはならなかったのですが、どんな研究者にもチャンスは訪れるものだとつくづく自覚しました。

2年間イリノイ大学にいた後、もう少し細胞内オルガネラの研究がした

いと考え、ボストンのタフツ大学でさらに2年間ポスドクとして過ごしました。ここでは、その当時問題となっていた細胞内酸性オルガネラの酸性化を担っているプロトンポンプの実体を解明するという、これまでとは全く異なるテーマを研究していました。ここ（Department of Physiology）は、まだ出きたての部局で、スタッフは殆ど私と同年代の若いプロフェッサーばかりで、どの研究室にも自由に出入りできたので、いろいろな技術や考え方を修得することができました。今やPI3キナーゼで有名なLewis Cantleyも当時は同じ部局にあり、PIP2の大きなピークの横に出る非常に小さなピークが増殖刺激で変動することに注目しておりました。このピークがあまりにも小さいので、そんなものに意味があるのかと部局内セミナーでは非常に評判が悪く、私が帰国後、これがPIP3キナーゼへと大発展するとはだれも予想していませんでした。

結局4年間アメリカで留学生活を送った後、出身教室の東大薬学部衛生化学教室に助手として戻ってまいりました。野島先生が退官された後、井上圭三教授が研究室を主宰されていまして、帰国した私は、「留学中の仕事は続けるな」、「脂質に関する研究をなさい」、「あとは何をしてもよい」という命題を与えられまして、自分としてのテーマを見つけていくことになりました。4年間の留学生活で蛋白質の扱いには多少自信が持てるようになっていましたので、まだ世界中で取れてもいないもので生理的意義も分かっていない脂質関連蛋白質を精製しようかと決めました。意味不明の蛋白質を研究していくと、きっとだれもが予想していない「新しい脂質の新しい機能」が見つかるのではないかと考えたからです。そして、これまでにI型およびII型PAFアセチルヒドロラーゼ（PAF-AH）、をはじめとし、ビタミンE輸送蛋白質（ α -TTP）、さらに最近ではホスファチジルセリン特異的ホスホリパーゼA1（PS-PLA1）、スクアレン輸送蛋白質（SPF）など様々な機能未知蛋白質を精製・クローニングしてきました。その結果、幸運にも α -TTPが先天性ビタミンE欠乏症の、そしてI型PAF-AH（の非触媒サブユニット）が先天性無脳回症の原因遺伝子であることなどを明らかにすることができました。さらに最近の結果によると、I型PAF-AHは細胞内の中心体・微小管形成に関与していること、また、II型PAF-AHは上皮系細胞の接着現象に関与することなどが判明してきており、まさに当初のくろみ通り、全く予想外の生理機能が明らかになってきました。ところが、この段階にいたり、これらの酵素の基質は本当にPAFなのか、あるいはほかに生理的な基質があるのか、さらにその基質（あるいは産

物)はいったい何をしているのか、といった脂質本来の解析が全く置き去りにされていました。すなわち、「新しい脂質の新しい機能」の解明を目指すなかで、「新しい機能」は見えてきたのですが、「新しい脂質」の部分にはまったく踏み込んでいないことに気がきました。分子生物学とゲノムプロジェクトの進歩により、現在新しい遺伝子の解析や相同性を持つファミリー遺伝子を見つけることは非常に容易になっています。私たちの研究室でも、蛋白質を精製するという基礎生化学から、遺伝子を切ったり貼ったりする分子生物学的手法につきましては人並みに研究できる体制は整えてはきましたが、その結果、脂質研究者の本来の目的であるはずの脂質そのものの研究が長らく置き去りになってきてしまいました。しかも、研究室員のなかには、遺伝子は扱えるけど脂質はさわったことがないというものも出始めてきています。私は、自らの研究においてまさに脂質そのものの研究の必要性が生じたように、今後、脂質そのものを研究対象とする方向性を打ち出していきたいと思っております。

脂質自体の研究が分子生物学に押されて研究の第一線から退いていった事実には、技術の遅れなどそれなりの理由があったと思います。しかしながら、最近の状況を見ますと、HPLCやマスなどの分析機器が飛躍的に進歩しており、以前では蛍光標識したり放射標識しなければ検出できなかったマイナー脂質が、官能基がない脂質も含めてそのまま、しかもごく微量で測定できるようになってきています。このような最新の技術を積極的に取り入れて、これまで行ってきた研究の欠落した部分、すなわち「新しい脂質」の同定に努めていこうと考えています。また、官能基がない脂質でも微量で定量できる技術は、単なる感度の問題ばかりでなく、例えば生きた細胞において、あらゆる脂質のパターンをモニターし、様々な生命現象とともに変化していく微量脂質を見つけていくような研究も可能になると思われます。これまでただの意味不明でバックグラウンドに過ぎなかった小さなピークが、非常に重要なシグナルを我々に与えてくれるようになると期待も膨らんできます。このように、今まで蛋白質の海から面白そうな蛋白質をとってきたように、今度は脂質の海の中からきらりと光る脂質を掴んでいきたいと思っています。以前、脂質生化学研究会に演題を出さなくなった知人が、参加しなくなった理由を「この会で脂質について勉強しようと思っていたが、会に出ても脂質そのものを余り勉強できなかった」と言われたことが今でも耳に残っています。脂質の分野では、最近におきましても、例えばソニックヘッジホッグにコレステロールが共有結合

しているとか、グレリンという食欲亢進作用のあるペプチドにc 8 脂肪酸が結合していたり、ホスファチジルエタノールアミンと共有結合した蛋白質が見つかるなど、まだまだ新しい発見があり、脂質の研究領域は宝の山といえます。残念なことは、こうした発見が必ずしも脂質研究者の中からなされていないことで、我々脂質研究者は、もう一度脂質そのものに眼を向けて研究をしなければならないと考えている今日この頃です。



42nd International Conference on the Bioscience of lipids Bergen, Norway. June 5-9, 2001

Scientific and social programme.

The scientific programme includes the traditional L. L. M. van Deenen lecture, lectures by invited speakers and oral communications selected from submitted abstracts. The programme will include sessions on the following topics.

- L. L. M. van Deenen Lecture
- Mitochondrial biogenesis and function
- Lipids as regulators of apoptosis and cell division
- Obesity and insulin resistance
- Membrane structure and membrane fusion
- Closing Lecture

Tuesday, June 5th

14.00 - 19.00	Registration at Grieghallen Conference Center	
17.00 - 17.15	Berge, Rolf K. (Norway)	Welcome addresses

L. L. M. van Deenen Lecture:

17.15 - 18.00	Glomset, John A. (USA)	Studies of the Distribution and Function of a Novel Phospholipase
18.30 -	Welcome reception hosted by the University of Bergen	

Wednesday, June 6th

Session 1. Mitochondrial biogenesis and function

9.00 - 9.45	Nouper, Walter (Germany)	Overview. Mitochondrial biogenesis and import of proteins
9.45 - 10.15	Cannon, Barbara (Sweden)	Thermogenesis and uncoupling proteins
10.15 - 10.45	Vina, Jose (Spain)	Oxidative damage to mitochondria
10.45 - 11.00	Selected oral communication	
11.00 - 11.30	Coffee break	
11.30 - 12.00	Whall, Walter (Switzerland)	Knock out approach to study PPAR-regulated lipid metabolism
12.00 - 12.30	Staels, Bart (France)	Transcription factors controlling lipid and lipoprotein metabolism.
12.30 - 12.45	Selected oral communication	
12.45 - 13.00	Selected oral communication	
13.00 - 13.15	Selected oral communication	
13.15 - 14.15	Lunch	
14.15 - 15.15	Poster session	

Session 2. Lipids as regulators of apoptosis and cell division

15.15 - 16.00	Doskeland, Stein O. (Norway)	Overview. Apoptotic pathways
16.00 - 16.30	Orrenius, Sten (Sweden)	Mitochondrial regulation of apoptotic cell death
16.30 - 17.00	Coffee break	
17.00 - 17.15	Selected oral communication	

17.15 - 17.30	Selected oral communication	
17.30 - 17.45	Selected oral communication	
17.45 - 18.00	Selected oral communication	

Thursday, June 7th

9.00 - 9.30	Unger, Roger (USA)	Lipotoxicity, lipopapoptosis and leptin: The bioscience of fatty acid-induced diseases
9.30 - 10.00	Kolesnick, Richard (USA)	Regulation of ceramide production and apoptosis.
10.00 - 10.15	Selected oral communication	
10.15 - 11.45	Poster session and coffee break	
11.45 - 12.15	Spiegel, Sarah (USA)	Sphingosine-1-phosphate in cell growth and cell death
12.15 - 12.45	Igarashi, Yasuyuki (Japan)	Extracellular regulation of cell functions by sphingosine derivatives
12.45	Lunch and boat excursion.	

Friday, June 8th

Session 3. Obesity and insulin resistance

9.00 - 9.45	Boden, Guenther (USA)	Overview: Role of fatty acids in the development of insulin resistance and type 2 diabetes
9.45 - 10.15	Wolliheim, Claes B. (Switzerland)	Mitochondrial signal generation in glucose-stimulated insulin secretion and its suppression by HNF-1 alpha mutations
10.15 - 10.45	McGarry, J. Denis (USA)	CPT-I and malonyl-CoA in insulin resistance
10.45 - 11.00	Selected oral communication	
11.00 - 11.30	Coffee break	
11.30 - 12.00	Auwerx, Johan (France)	Transcription factor activators and insulin sensitivity
12.00 - 12.30	Arner, Peter (Sweden)	Genetic disposition and human obesity. Role of genes in control of lipolysis.
12.30 - 12.45	Selected oral communication	
12.45 - 13.00	Selected oral communication	
13.00 - 14.00	Lunch	
14.00 - 14.30	Poster Session	
14.30 - 15.00	Spiegelman, Bruce M. (USA)	Transcriptional control of adipogenesis and energy balance
15.00 - 15.30	Zammit, Victor (UK)	Lipid converting enzymes
15.30 - 15.45	Selected oral communication	
15.45 - 16.00	Selected oral communication	
16.00 - 16.30	Coffee break	

Session 4. Membrane structure and membrane fusion

16.30 - 17.00	Storlien, Leonard H. (Australia)	Membrane lipids and insulin sensitivity
17.00 - 17.30	Chernomordik, Leonid V. (USA)	Mechanisms of membrane fusion
17.30 - 17.45	Selected oral communication	
17.45 - 18.00	Selected oral communication	
19.30 - 20.00	Reception by the Mayor of Bergen	
20.00 -	CONFERENCE DINNER	

Saturday, June 9th

10.00 - 10.30	Epand, Richard M. (Canada)	Molecular properties and viral fusion
10.30 - 11.00	Mouritsen, Ole G. (Denmark)	Nano-scale structuring of lipid membranes
11.00 - 11.15	Selected oral communication	
11.15 - 11.	Selected oral communication	
11.30 - 12.00	Coffee break	
12.00 - 12.30	de Kruijff, Ben (The Netherlands)	The bilayer as it copes with incoming polypeptides
12.30 - 12.45	Selected oral communication	
12.45 - 13.00	Selected oral communication	

Closing Lecture:

13.00 - 13.45	Corsini, Alberto (Italy)	The pleiotropic effects of Statins: Role of prenylated proteins.
13.45 - 14.00	End of the meeting and Invitation to the 43rd ICBL in 2002.	

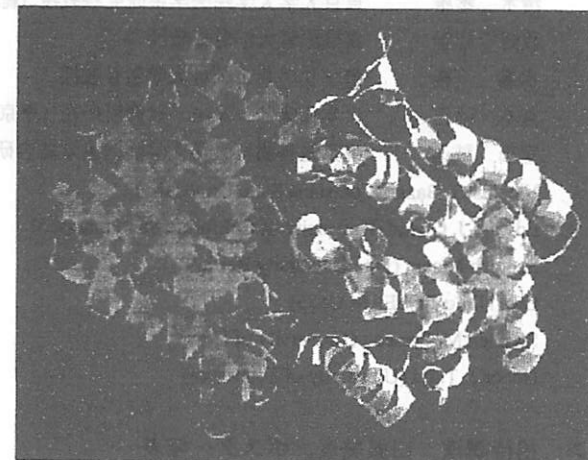
Seventh International Congress on Platelet-Activating Factor and Lipid Mediators

第7回 血小板活性化因子(PAF)と脂質メディエーターに関する国際会議

(略称: PLM2001)

September 24-27, 2001, Tokyo, Japan

<http://homepage2.nifty.com/PAF2001/>



*42nd International Conference
on the Bioscience of Lipids*

*Bergen, Norway
June 5-9, 2001*

For more information:
<http://www.icbl.stjohns.no>

Chairperson:
Professor Rolf Kristian Berge

Committee:
Hohn Holmsen Torgeir Flatmark
Jon Skorve Lise Madsen
Hege Weigedahl Karl J. Tronstad
Kjetil Berge Endre Dynoy

Highlighted Central Themes:

1. Mitochondrial biogenesis and function
2. Lipids as regulators of apoptosis and cell division
3. Obesity and insulin resistance
4. Membrane structure and membrane fusion

Correspondence:
Professor Rolf Kristian Berge
Department of Clinical Biochemistry
University of Bergen Haukeland Hospital
N-5021 Bergen, NORWAY
Phone: +47-55-973098, Fax: +47-55-973115
icbl2001@uib.no

Announcement from the Committee

<http://bio.m.u-tokyo.ac.jp/icbl/>

- <会 期> 2001年9月24日(月)~27日(木)
- <会 場> 早稲田大学国際会議場 (東京都新宿区西早稲田 1-20-14)
- <主 催> 日本脂質生化学研究会
- <委員長> 和久敬蔵 (帝京大学薬学部)

<主なテーマ>

- Biochemistry, molecular biology, physiology, pathology and pharmacology of :
- Platelet-activating factor
 - Lysophosphatidic acid
 - Sphingosine-1-phosphate
 - Phospholipase A₂
 - Eicosanoids
 - Oxidized phospholipids
 - 2-Arachidonoylglycerol and anandamide

<Organizing Committee>

名誉委員長	野島 庄七	帝京大学副学長
委員長	和久 敬蔵	帝京大学薬学部教授
副委員長	脊山 洋右	東京大学大学院医学系研究科教授
国内委員	新井 洋由	東京大学大学院薬学系研究科教授
	井上 圭三	帝京大学薬学部教授 (財務担当)
	清水 孝雄	東京大学大学院医学系研究科教授 (総務担当)
	牧野 壮平	獨協医科大学名誉教授
	水島 裕	聖マリアンナ医科大学名誉教授
	宮本 昭正	日本臨床アレルギー研究所所長 (東京大学名誉教授)
	室田 誠逸	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科教授
海外委員	Nicolas G. Bazan (Louisiana State University)	
	Edward J. Goetzl (University of California San Francisco)	
	Santosh Nigam (Free University Berlin)	
	Ewa Ninio (INSERM U525)	
	Stephen M. Prescott (University of Utah)	
	Gabor J. Tigy (University of Tennessee)	

<会議構成> 招待講演, 口頭発表, ポスター発表

<演題申込締切> 2001 年 6 月 15 日 (金)

<参加費>

- ・ 2001 年 8 月 24 日 (金) まで
一般 : 35,000 円 学生 : 10,000 円
- ・ 2001 年 8 月 25 日 (土) から当日まで
一般 : 45,000 円 学生 : 10,000 円

<お問合せ先>

第 7 回 血小板活性化因子 (PAF) と脂質メディエーターに関する国際会議事務局
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-2-8 フローラビル 7F
(財) 日本学会事務センター内
TEL : 03-3815-1681 FAX : 03-3815-1691 E-MAIL : van@bcasj.or.jp
WEBSITE : <http://homepage2.nifty.com/PAF2001/>

◎詳細は、2 月下旬発行予定の Second Circular またはホームページをご覧ください。

会の活動状況

1 第 42 回日本脂質生化学研究会・研究集会の開催

実行委員長 : 古賀洋介教授 (産業医科大学・生体物質化学)
日時 : 平成 12 年 6 月 16 日 (金)、17 日 (土)
会場 : 北九州国際会議場
演題数 : シンポジウム 7 題、一般演題 68 題
参加数 : 177 名

2 第 42 回日本脂質生化学研究会総会

平成 12 年 6 月 16 日 (金) 午後 6 時より、北九州国際会議場イベントホールにて開催された。

総会次第

脊山洋右会長の挨拶の後、第 42 回研究集会実行委員長古賀洋介教授の挨拶に引き続き、以下の議事が進行された。

議事

(1) 平成 11 年度事業報告及び決算報告

平成 11 年度の事業及び決算が配付資料に沿って報告された。研究会事務局の業務は通常どおり円滑に進んでいるとの報告がなされた。決算については収支がほぼ均衡しており、健全財政であるとの報告がなされた。

(2) 平成 11 年度決算報告につき監査の結果が報告され、承認された。

(3) 平成 12 年度事業計画案

平成 12 年度における、第 42 回日本脂質生化学研究会・研究集会、第 41 巻脂質生化学研究 (要旨集) の発行、脂質生化学研究 Circular 2000 の発行、第 42 回総会、平成 12 年度第 1 回および第 2 回幹事会の事業計画案が説明され、承認された。

(4)平成12年度予算案

ほぼ例年通りの平成12年度予算案が提案され、承認された。

(5)新幹事・名誉会員について下記の事項が承認された。

イ)平成12年12月31日任期終了予定の幹事の再任(平成13年1月1日～平成16年12月31日迄)

ロ)以下6人の新幹事の承認(平成13年1月1日～平成16年12月31日迄)
新井 洋由(東大院・薬)、石永 正隆(広島女子大・生活科学)、
今泉 勝己(九大院・栄養化学)、大西 正男(帯広畜産大・生資科)、
宮下 和夫(北大・水産・生物化学工学)、吉本 谷博(金沢大医・薬理)(他に二人の新幹事の推薦があったが非会員であったため承認されなかった。)

ハ)以下13人の新名誉会員の承認

赤松稔、池沢宏郎、市原宏介、植田伸夫、小野輝夫、鬼頭誠、
武富保、野澤義則、橋本隆、飯田静夫、矢野郁也、山本尚三、
和久敬蔵

(6)平成13年度(第43回)研究集会の準備状況の報告

実行委員長 : 中野益男 教授(帯広畜産大学・生物資源科学科)
日時 : 平成13年6月21日(木)、22日(金)
場所 : 帯広市・とかちプラザ

(7)平成14年度(第44回)研究集会の実行委員長の選出

平成14年度研究集会の実行委員長に西島正弘部長(国立感染研)が選出された。

3 平成12年度 日本脂質生化学研究会 第1回幹事会

平成12年6月16日(金)正午より、北九州国際会議場第11会議室にて開催された。総会に提案すべき事項を審議した。議事内容は総会と同じ。

4 平成12年度 日本脂質生化学研究会 第2回幹事会

日時:平成12年12月4日(月) 午後5時30分-8時

会場:学士会館赤門分館

参加者:

(名誉会員、幹事)阿部敏明、新井洋由、荒木英爾、猪飼篤、石塚稻夫、五十嵐靖之、和泉孝志、井上圭三、大島由美子、金田尚志、工藤一郎、斎藤政樹、渋谷勲、島崎弘幸、清水孝雄、脊山洋右、竹縄忠臣、内藤周幸、中川靖一、中野益男、西島正弘、飯田静夫、平林義雄、宮下和夫、吉岡亨、吉本谷博、和久敬蔵(以上計27名)
(オブザーバー)八杉悦子、横溝岳彦、山崎均(学会事務センター)、堀口麻衣子(学会事務センター)

議事

[1]平成12年度事業報告、決算案の審議

1)平成12年度事業報告

会員数 正会員733名(平成12年11月1日現在)

但し、平成11年11月～平成12年11月 新入会21名、退会45名、種別変更13名(名誉会員へ)

名誉会員16名(事業計画の項参照) 来年度から29名

賛助会員17社(事業計画の項参照)

役員 会長 脊山洋右(平成14年12月31日迄)
庶務幹事 清水孝雄(同上)
会計幹事 山田信博(同上)
会計監査 植田伸夫(同上)
幹事 (事業計画の項参照)

事業

イ)平成12年度(第42回)研究集会の開催

実行委員長:古賀洋介教授(産業医科大学・生体物質化学教室)

日時:平成12年6月16日(金)、17日(土)

場所:北九州国際会議場

演題数:シンポジウム 7題、一般 68題

参加数:177名

- ロ) 脂質生化学研究 42巻の発行 (本文297頁)
ハ) 脂質生化学研究 Circular 2000 の発行 (本文42頁)
ニ) 総会及び幹事会の開催

総会 平成12年6月16日(金) 北九州国際会議場
第1回幹事会 平成12年6月16日(金) 北九州国際会議場
第2回幹事会 平成12年12月4日(月) 学士会館赤門分館

幹事の承認

- イ) 平成12年12月31日任期終了予定の幹事の再任
(平成13年1月1日～平成16年12月31日迄)
(注: 安藤進先生、岡田伸太郎先生は辞退)

ロ) 以下6人の新幹事の承認

(平成13年1月1日～平成16年12月31日迄)
新井 洋由(東大院・薬)、石永 正隆(広島女子大・生活科学)、今
泉 勝己(九大院・栄養化学)、大西 正男(帯広畜産大・生資科)、
宮下 和夫(北大・水産・生物化学工学)、吉本 谷博(金沢大医・
薬理)但し、第1回幹事会にて金保 安則(都臨床研・薬理研究
部)、斎藤 衛郎(国立健康栄養研・食品科学)の推薦があったが
非会員のため承認しない。

ハ) 以下13人の新名誉会員の承認

赤松 稔、池沢宏郎、市原宏介、植田伸夫、小野輝夫、鬼頭誠、
武富保、野澤義則、橋本隆、飯田静夫、矢野郁也、山本尚三、
和久敬蔵

ニ) 平成13年度(第43回)研究集会の準備状況の報告

実行委員長 : 中野益男 教授(帯広畜産大学・生物資源科学科)
日時 : 平成13年6月21日(木)、22日(金)
場所 : 帯広市・とかちプラザ

ホ) 平成14年度(第44回)研究集会の実行委員長の選出

平成14年度研究集会の実行委員長に西島正弘部長(国立感染
研)が選出された。

- 2) 平成12年度会計報告 (別表参照)
以上の事業報告及び会計報告が承認された。

[2]平成13年度事業計画、予算案の審議

1) 平成13年度事業計画

会員数 正会員微増の見込み

役員 会長 脊山洋右 (任期平成14年12月31日迄)

庶務幹事 清水孝雄 (同上)

会計幹事 山田信博 (同上)

会計監査 井上圭三 (同上)

植田会計監査より、辞退の旨連絡があったため、井上圭三教授を選出
した。なお、これは、平成13年の本研究会総会で追認される予定で
ある。

幹事

(任期 平成13年12月31日迄)

猪飼 篤、石塚稻夫、石橋輝雄、伊藤精亮、大木和夫、古賀洋介、
里内 清、瀧 孝雄、竹縄忠臣、田辺 忠、保坂公平、室伏きみ子、
村田紀夫、横山信治

(任期 平成14年12月31日迄)

岩森正男、宇田 裕、内海英雄、工藤一郎、島崎弘幸、鈴木康夫、
瀬高守夫、高桑雄一、高野達哉、塚谷博昭、二木鋭雄、西島正弘、
宮澤陽夫

(任期 平成15年12月31日迄)

青山俊文、赤沼安夫、秋野豊明、阿部敏明、荒木英爾、有田 斎、
五十嵐靖之、猪川嗣郎、和泉孝志、板倉弘重、伊藤俊洋、井上圭三、
入谷信子、遠藤 章、大島美恵子、岡本光弘、奥田拓道、奥山治美、
川口昭彦、菊川清見、黒木由夫、斎藤政樹、渋谷 勲、杉田陸海、
鈴木明身、谷口直之、玉井洋一、中川靖一、中野益男、西村顕治、
野間昭夫、平林義雄、廣野治子、水柿道直

(任期 平成16年12月31日迄)

新井洋由、石永正隆、今泉勝己、大西正男、上田隆史、加納英雄、

賀佐伸省、北 徹、楠瀬正道、斉藤恵実、菅野道廣、武内 望、
秦葭哉、平山 修、藤本健四郎、堀内正公、松沢佑次、三成 脩、
宮下和夫、三輪匡男、保田立二、山下 哲、山田晃弘、山本徳男、
吉岡 亨、吉本谷博、渡辺清博 (以上 88 名)

名誉会員

山川民夫 (名誉会長)、赤松 稔、池沢宏郎、市原宏介、植田伸夫、
小野輝夫、数野太郎、金田尚志、鬼頭 誠、児島英也、斉藤国彦、
武富 保、内藤周幸、野沢義則、野島庄七、野田万次郎、箱守仙一郎、
橋本 隆、林 陽、飯田静夫、藤野安彦、牧田 章、松本 亮、
永井克孝、矢野郁也、山添三郎、山本 章、山本尚三、和久敬蔵
(以上 29 名)

賛助会員

(10 口) エーザイ (株)
(5 口) 大日本製薬 (株)、塩野義製薬 (株)、キッセイ薬品工業 (株)
(4 口) 三共 (株)、住友製薬 (株)、藤沢薬品工業 (株)、山之内製薬
(株)
(3 口) (株) 資生堂、(株) 東京化学同人、雪印乳業 (株)、
(株) エー・イー企画、三菱東京製薬 (株)
(2 口) 花王 (株)、大塚製薬 (株)、萬有製薬 (株)、(株) ヤクルト
(以上 17 社・64 口)

事業

- イ) 平成 13 年度 (第 43 回) 研究集会
実行委員長 : 中野益男 教授 (帯広畜産大学・生物資源科学科)
日時 : 平成 13 年 6 月 21 日 (木)、22 日 (金)
会場 : 帯広市・とかちプラザ
- ロ) 脂質生化学研究 43 巻発行
演題募集 (Circular 2001 の発行時に) : 2 月上旬
演題申込および原稿締切 : 4 月上旬
プログラム編成会議 : 4 月中旬
入稿 : 4 月下旬
講演集発送 : 5 月中旬

ハ) 脂質生化学研究 Circular 2001 の発行 2 月上旬

二) 会議

日本脂質生化学研究会総会 : 平成 13 年 6 月 21 日
第 1 回幹事会 : 平成 13 年 6 月 21 日
第 2 回幹事会 : 平成 13 年 11 月

3) 平成 13 年度予算 (別表参照)

平成 13 年度事業計画及び予算計画が承認された。

○平成 12 年度決算表及び平成 13 年度予算表

収入の部 項 目	平成 12 年度		平成 13 年度
	予算	決算	予算
正会員会費	2,310,000	1,983,000	2,310,000
入会金	50,000	44,000	50,000
賛助会員会費	570,000	490,000	570,000
講演集売上	180,000	110,000	180,000
広告収入	1,000,000	951,825	1,000,000
利子	1,000	898	1,000
寄付金	0	30,000	0
雑収入	50,000	40,000	50,000
小 計	4,161,000	3,649,723	4,161,000
前年度よりの繰越金	3,167,702	3,167,702	3,426,735
計	7,328,702	6,817,425	7,587,735

支出の部 項 目	平成 12 年度		平成 13 年度
	予算	決算	予算
研究集会補助	900,000	900,000	900,000
会報製作費	130,000	127,990	130,000
講演集製作費	750,000	668,745	700,000
旅費	200,000	66,900	200,000
郵送料・通信費	450,000	374,772	450,000
事務用品費	100,000	108,431	100,000
会合費	250,000	178,371	250,000
謝金	50,000	20,000	50,000
総会経費	5,000	0	5,000
事務経費	250,000	250,000	250,000
事務委託費	720,000	691,908	720,000
雑費	50,000	3,570	50,000
小計	3,855,000	3,390,690	3,805,000
次年度への繰越金	3,473,702	3,426,735	3,782,735
計	7,328,702	6,817,425	7,587,735

賛助会員

- (10 口) エーザイ (株)
- (5 口) 大日本製薬 (株)
塩野義製薬 (株)
キッセイ薬品工業 (株)
- (4 口) 三共 (株)
住友製薬 (株)
藤沢薬品工業 (株)
山之内製薬 (株)
- (3 口) (株) 資生堂
(株) 東京化学同人
三菱東京製薬 (株)
雪印乳業 (株)
(株) エー・イー企画
- (2 口) 花王 (株)
大塚製薬 (株)
萬有製薬 (株)
(株) ヤクルト

(以上 17 社・64 口)

日本脂質生化学研究会 会則

第1条 名 称

本会を日本脂質生化学研究会 (The Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids, JCBL) と称する。

第2条 目 的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展と向上を図り、あわせて研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事 業

本会は、第2条の目的を達成するために、次の事業をおこなう。

- (1) 研究集会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会 員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者。
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者。
- (3) 名誉会員は、幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役 員、幹 事、名 誉 会 長

- (1) 本会は、その運営のために、役員として会長1名、庶務幹事1名、会計幹事1名、会計監査1名をおき、役員会を構成する。
- (2) 本会の運営上の重要事項について役員会の諮問に応ずるものとして幹事をおく。
- (3) 役員および幹事は幹事会を構成し、会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長は幹事会に出席して意見を述べることができる。

- (5) 会長、庶務幹事、会計幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するために、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、毎年1月1日より12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は、会計監査によって監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は、会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員に便宜を供する。

附 則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。

(平成11年6月3日改訂)

研究会事務の取り扱い内容と連絡先

[I] 日本脂質生化学研究会事務局で扱う事務

1. Circular の原稿依頼・編集等
2. 研究集会の演題受付
3. 要旨集の原稿受付・編集等
4. 総会・幹事会の案内・資料作成等
5. その他

連絡先：日本脂質生化学研究会事務局

〒112-8610

東京都文京区大塚 2-1-1

お茶の水女子大学生活科学部内

Tel & Fax: 03-5978-5752

[II] (財)日本学会事務センターで扱う事務

1. Circular および要旨集の発送とその未着クレームの受付
2. 年会費の請求および徴収
3. 所属・住所・氏名等の変更の受付
4. 入会・退会の受付

連絡先：

〒113-8622 東京都文京区本駒込 5-16-9

(財)日本学会事務センター会員業務部

Tel : 03-5814-5810

Fax : 03-5814-5825

[III] 日本脂質生化学研究会会費

入会金 2000 円

年会費 3000 円

入会ご希望の方は上記の日本学会事務センター会員業務部までお問い合わせ下さい。